IATSS三十周年によせて

人とこころの道づくりー中国・韓国との交流の経験から

高羽禎雄　東京工科大学コンピュータサイエンス学部教授

1958年東京大学工学部電気工学科卒、同大学院修士・博士課程修了。63年東京大学助教授、77年教授。96年東京工科大学教授、現在コンピュータサイエンス学部勤務。日本シミュレーション学会会長、ITS世界会議理事等を歴任。ITS-Japan名誉会員。

1936年に生まれて約半年を過ごした韓国を1983年に再訪して以降、この十年は毎年1回の割合で累計16回訪問している。中国には1942年に半年滞在したことがあり、1984年から1990年まで毎年1回訪問し、現在まで累計14回となる。情報科学など基礎科学分野での日韓の共同研究、シミュレーション分野での日中・日韓の学会の交流、道路交通管理分野における日中の交流と、その先進的な姿であるITS（Intelligent Transport Systems）の推進に関わることなどが用務であった。

なかでも忘れることのできないのは、1985年から1990年まで国際交通安全学会が行った3回の日中交通管理学術討論会と合計6回に及ぶ相互訪問である。初代茅誠司会長の中国に対する想いを踏まえた試みであったが、文化大革命の動乱を経て道路交通法規を再構築し、自動車台数の急増によって不可避となった交通事故死者数の増加に如何に対応するか、国際的な判断のもとで欧米から導入した技術をどう活用するか、という課題に取り組む中国の交通管理・技術担当の方々への、広い視野に立った協力であった。先進技術の導入にとどまらず国情に適した地道な施策を重視して事故死者数の急増をとどめることには、いささかの貢献をなし得たと考えている。相互訪問でそれぞれの方々の人柄を知り、親しくなった思い出も忘れがたい。IATSSフォーラムが開催される鈴鹿の宿舎を利用した会合の後で、中国の古戦場を偲んだ日本の筝曲『赤壁の賦』を私が演奏し、それに応えて大草原をわたる風のような朗々たる美声を聞かせて下さったR氏の凛々しい姿が脳裏をよぎる。

中国では個人でも、北京や上海その他での会合で官庁や大学など立場の異なる人が意見の交換により考えをまとめてゆく過程や、いつもはあまり交流のない人が気配りを持って接してゆくようすを見聞して、感銘を受けたことがある。私自身の日程の都合でたまたま同席された専門の異なる大学人と官僚の紹介役を果たしたり、地方には数少なかったビデオ機器で、コン・リー主演の名画『紅高粱』を大学でともに鑑賞したこともあった。

韓国では、1991年にアメリカの学会でアジア諸国の活動を紹介する企画を私が進めたのがきっかけで、その翌年韓国シミュレーション学会が設立された。韓国のIT化が急速に進展する中で同学会は会員800名を擁する組織に成長し、2004年10月には同学会を中心に韓国・日本・中国の三学会が共同開催するAsia Simulation Conferenceが韓国済州島で開催された。韓国の学会設立をリードした初代会長が、要職にある多忙な立場で開会挨拶を行った後中国での会議に出向く一方、明年中国北京での次回会合を担当する中国の学会の会長が多数のメンバーを連れて参加し、日本・ドイツ・アメリカ・オーストラリアなどから有力メンバーが顔を見せるなど、三国を軸とした交流を深める中で、時代を背負う若者を国際人に育てようとする気概に満ちた会合であった。私が伴った留学生を含む三名の若者にとっても、忘れ得ぬ思い出となるであろう。

1998年ソウル、2001年シドニー、2004年日本（愛知県名古屋市）と3年毎にアジアで開催されたITS世界会議は、2007年には北京で開催される。アジア諸国ではモータリゼーションの進展の結果、交通事故死者がこの20年で倍増しており、格別の施策が必要である。それぞれの国の個々人の奥行きのある交流をベースとして、共通の目標の達成を目指し、ひいてはその根底となる平和の確立を

志向することを念願するものである。